

ロシア留学体験レポート

国際学部国際学科 2年

酒井健佑

以前から憧れていたロシアの地に降り立った私は些か興奮をしていた。幼い頃からロシアに興味を持っていた私にとって、長年の夢を叶えたとも等しい出来事であった。また、ロシア・ウラジオストクの地が初の海外渡航地となった。

留学前に不安だった点は、現在の語学能力で留学をして、授業に果たしてついていけるのかという点であった。大学1年の後期から約1年間ロシア語を習い始めたが、中学英語レベルの文章、単語を覚えていなかった。しかし、留学先では先生方が親身になって教授してくれたおかげで、徐々に慣れて理解していくことができた。日本でロシア語を勉強することもできるが、周りには日本人が殆どでロシア人はあまりいない。そのため、習った会話表現や単語などを使う場面がなくあまり活かすことができない。その点、現地で言語を勉強することができれば、習った表現を使う機会が日常に溢れているため会話の反復がしやすくなり、上達のスピードが速くなる。ネイティブスピーカーがあらゆるところにいるという点で留学は優れていると改めて感じた。

また、留学をして文化を多く知ることができた。今まで映像や教科書、本を通してしか見たことのなかったロシアを初めて肉眼で見ることができた私は感銘を受けた。ウラジオストクは日本とさほど離れていない地であるのにヨーロッパの街並みが広がっており、日本の街とは全く違った風景であった。また、街でロシアのバンドの曲や、レストランでロシア料理を味わったり聴いたりすることで、味覚や聴覚でも楽しんだ。ロシア人の方と交流する機会が多く、レストランや観光スポットなどを教えてもらうことが多かった。留学する前、私の偏見でロシア人は無口で冷徹、酒に強いというステレオタイプなイメージを持っていた。しかし、実際に会って話してみると皆気さくで明るい人ばかりであった。ただ、酒に強いというイメージはそのままであった。度数の強いウォッカをストレートで何杯も飲んでいるのを見て私は呆然とした。知ることができたのはロシアの文化だけではなく、ロシア語を勉強しにきている韓国人の留学生達と交流することで韓国の文化や言葉を知ることができた。同じクラスで共に授業を受け、寮も同じ階で生活していた彼らとは仲を深めることは難しくなかった。日本語が非常に上手な韓国の方が2人いたことも大きく、休日や行事の際には行動を共にすることもあった。

短期の留学であったが、様々な経験を得られ、見聞を広められた4か月であった。親元を離れて寮生活になったことで、当たり前のように親がしてくれていた洗濯や、料理の大変さを理解できた。私はこの寮生活で自炊をすることが必要に迫られたことで、初めて自分一人で料理をしたのだが、これがなかなか面白く、料理が新しい趣味の一つとなった。今後の人生において役に立つであろう料理を趣味にできたのもこの留学のおかげだと考えている。留学は私にとって一生の思い出となった。ロシアへの興味関心はより一層深いものとなったため、この体験を今後の大学生活、果ては人生に役立てていきたいと考えている。